東京成徳大学・東京成徳短期大学図書館分館
図書館だより
Vol. 22
2020. 6. 1 発行
図書館運営委員会

推薦図書

『流行性感冒－「スペイン風邪」大流行の記録
内務省衛生局編
平凡社
推薦教員
人文学部　日本伝統文化学科
小薗　崇明　助教

八千代キャンパスの図書館（分館）に入って、階段を上ると、学習コーナーの横に緑色の表紙の本がずらりと並んだ棚がある。この本は東洋文庫と呼ばれ、平凡社が刊行する叢書シリーズであり、1963 年に創刊された。文学・歴史・哲学など古今東西、幅広い分野の文献が刊行されており、2010 年には 800 タイトルに達している。私は、実は本学の卒業生（！）だが、約 20 前に学生だった時もこのシリーズは同じ場所に配架されていた。授業に関係するから読んだ本もあるが、興味を惹かれていろいろな本を手に取った。仏教説話の『日本霊異記』、円仁の『入唐求法巡礼行記』、イザベラ・バードの『日本奥地紀行』・『朝鮮紀行』、アラビアのロレンスの『知恵の七柱』などなど。どれも魅力的な本で、私は読みながら遠い過去や、いろいろな地域に想いを馳せたものである。さて、その東洋文庫シリーズから今回は『流行性感冒－「スペイン風邪」大流行の記録』を取り上げたい。

現在、新型コロナウイルスの影響で、大学の授業は基本的にはオンラインで行われている。外出できず、アルバイトもできず、友人にも会えず、それでストレスを抱えている学生もいるのではないだろうか。ストレスを抱えている学生は、人間が歩んできた過去を振り返ってみるのもいいかもしれない。病気の流行によって社会が混乱する場面というのは歴史上、何度もあった。ペストであったり、コレラであったり、そして「スペイン風邪」もその一つである。「スペイン風邪」は「スパニッシュ・インフルエンザ」、「流行性感冒」などと呼ばれたが、発生源はスペインではない。第一次世界大戦中に感染が拡大していく中で、スペインは中立国であったため、情報をオープンにしていた。報道源の多くがスペインであったために、さもスペインで発生したかのように錯覚され、このような名称がついたのである。

日本では 1918 年から 1921 年の間で 3 回にわたり流行し、約 39 万人の死者を出した（他の研究ではもっと多い）。死者の数は驚くべき数値で、私の専門は関東大震災であるが、1923 年の関東大震災の死者は約 10 万 5000 人である。その 3 倍以上の犠牲者が出た。関東大震災は日本近現代史上、最も多くの犠牲者が出た災害として、それなりに多くの人に知られているが、「スペイン風邪」は今回のコロナ禍以前は、あまり注目されていなかったのではないだろうか。同時代的にも「スペイン風邪」があまり注目されなかったようであるが、その理由として、西村秀一さん（ウイルス学）の解説によると、①第一次世界大戦下に流行していたために、当時のメディアは大戦を中心に報道していたこと、②「スペイン風邪」以外の呼吸器系疾患で亡くなる人が、もともと多かったことが挙げられている。本書は、今回のコロナ禍の中で注目され、10 年ぶりに重版されたようである。

さて、本書は 1922 年、内務省衛生局より刊行された『流行性感冒』を翻刻したものである。西村さんの解説によると、「当時の中央行政の公衆衛生担当部局が編纂した唯一の報告書」（本書、p 444）であり、貴重な資料とされる。内容は、日本国内の被害状況だけではなく、外国の被害状況、日本の植民地（朝鮮・台湾）の被害状況、国内でも道府県別（この頃、「都」はない）の被害状況、これら各地域での予防対策、当時の各国の専門家の見地などをまとめている。

内容をいくつかあげてみると、世界的な大流行（パンデミック）の原因として、「戦争が此の病原力増大に関係あり」とし、「住民の移動、軍隊の輸送は病毒感染の機会を多からしめ」たと指摘している（同、p52）。また、「若し患者の隔離、工場に於ける換気の改善、群衆の絶対禁止等が励行せられしならんには本病の災害を減ずること可能なりしならんも、戦時にありては只防疫に専らなるを得ず」とし、戦争のために予防が困難であったことを指摘している（同、p 51）。本書では、世界全体の患者数・死者数は記録されていないが、一説では世界人口の 3 分の 1、または約 5 億人の患者数、死者数は 4,000 万人～ 1 億人という報告もある（国立感染症研究所・感染症情報センターの ＨＰ）。これだけの被害が及んだパンデミックの原因に第一次世界大戦は大きく関係しているのである。逆に、第一次世界大戦について、「スペイン風邪」との関係で考えてみるのも興味深いだろう。

第一次世界大戦というと、新兵器として、戦車、航空機、毒ガスなどが登場したと知られている。その中で毒ガスは開戦の翌年、1915 年にドイツ軍によって使用され、交戦各国はすぐにガスマスクを配備して対応した。本書によると、スイスは「スペイン風邪」の予防策として、ガスマスクの訓練を中止している（本書、p80）。スイスはご存知の通り永世中立国であり、第一次世界大戦に参戦していないが、周囲が交戦国であるため、最新兵器に対する軍事訓練（毒ガス対策）を大戦中に行っていたことが考えられる。当時も今と同じように、予防策として、世界各国でマスクの着用が励行されるが、この時にスイスで使われた訓練時の軍用ガスマスクは使い回しのために、感染予防の見地から禁止されたと思われる。

日本における対策では、マスクの奨励（特に劇場、寄席、活動写真館などの入場者、電車、乗合自動車などの乗客に対して）、また、観光地などでの集合を避けること、うがいの奨励、患者の隔離などが挙げられている（同、p 134、135）。100 年前に行われたこれらの予防は、日本以外の国々でも同様に行われたのであるが、現在の新型コロナウィルスへの対策とほとんど変わらないことがわかるだろう。マスクに関しては、東京府の報告の中で、「供給需要に応ぜず、為めに不正の商人暴利を貪る等の事実ありて」、「各警察署長をして是等不正商人の取締を厳重に行はしめ一面家庭に於て之（マスク）が作製を奨励し」たとある（同、p 200）。この状況も今回の状況と通ずるところがあるだろう。

アメリカの対策に関する報告書では、「酒精の使用は其予防に効果あらず」（同、p94）とある。「酒精」とは、アルコールのことであり、消毒用というよりはお酒のことだと思われる。飲兵衛はよくアルコール消毒と称して、お酒を飲む（よね？）が、当時は真剣にそれを実践した人が結構いたのかもしれない。もっとも今回のコロナ禍の中では、消毒用アルコールが入手困難なために、度数の高いアルコールが売れたという話があった。ポーランドのウォッカ「スピリタス」はアルコール度数が 96 度もあるが、専門家によると短時間で蒸発してしまい、消毒には向かないという意見もある。こうした事例は、後世どう見られるのだろうか。

もう一つ、アメリカの報告書では、「頑迷にして不注意なるもの公衆衛生に無頓着なるものは告示を以て公衆に知らしむること」（同、p 93）という対策が取られたようである。今回、大阪府や神奈川県などが休業要請に応じないパチンコ店の店名を公開したのと同様、社会的制裁を与えるためだと思うが、その後どうなったのかが気になる。実際に告示をしたのだろうか。残念ながら本書にそれは記されていない。今回、日本では「自粛警察」が、公表された店に限らず、自粛要請に応じない個人や商店などを攻撃している。私には、自粛に従う、自由を奪われた人たちが、自由に営業を続けていると勝手に判断したお店に反発して攻撃しているように思える。お店側が営業し続けなければならない理由を想像することができない。バーやクラブはもともと水商売なんだから、不安定なのはしょうがないでしょと自己責任論で片付けられてしまう。お店側からすると、お店をたたんで、ウィルスを避けたとしても、食っていけないようでは死んでしまう。そういう不安があるだろう。そうならないような補償を考え、制度化することこそ急務に思えるのだが…。当時のアメリカのような対策を日本で行ったかどうかは本書を読む限り不明である。また、経済的な問題・対策についても記されていない。これらについては、他の資料に当たらないといけないだろう。

あらためて、本書は約 100 年前のパンデミック、「スペイン風邪」に関する公的な記録である。コロナ禍の終息はまだまだ見えない中、100 年前をふり返りながら、現代について考えるのもいいのではないだろうか。歴史を学んでも、すぐに、現在の問題を解決することには繋がらないかもしれないが、全くヒントがないところからはじめるよりも、過去の事例から生きるヒントを得る方がいい。歴史を学ぶ意義である。本書は、現在のパンデミックを考えるきっかけになるものと言えるだろう。